

## 1. 亀山市の自然環境

### (1) 気象

気候については、基本的には比較的温暖で夏季に降水量の多い表日本型の気候で、標準的な東海型の気候区に属しますが、冬季には、いわゆる“鈴鹿おろし”とよばれる季節風の影響を大きく受けることから、高標高地の積雪量の多い寒冷な鈴鹿山脈の脊梁部<sup>せきりょう</sup>まで含むため、平野部と山地の気候の差が大きい特徴を有しています。

亀山地域気象観測所における平成25年度の当市の気温と雨量を図1-1Aに示します。平成25年度の年平均気温は15.3℃であり、年間降水量は1,618.0mmでした。

図1-1A 気温と雨量（平成25年度）

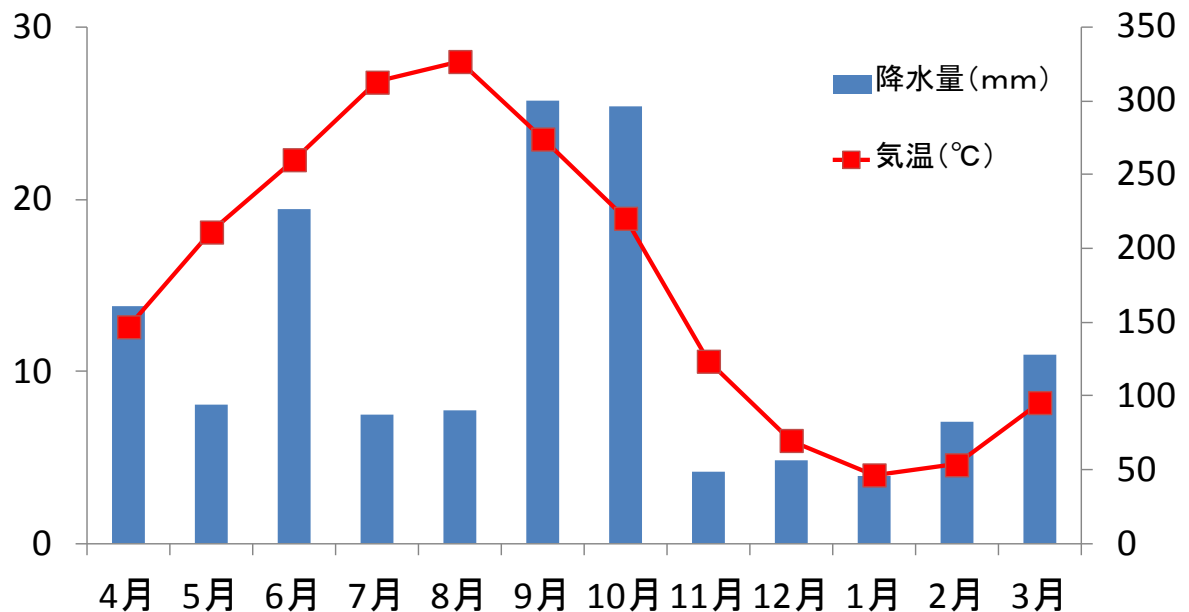
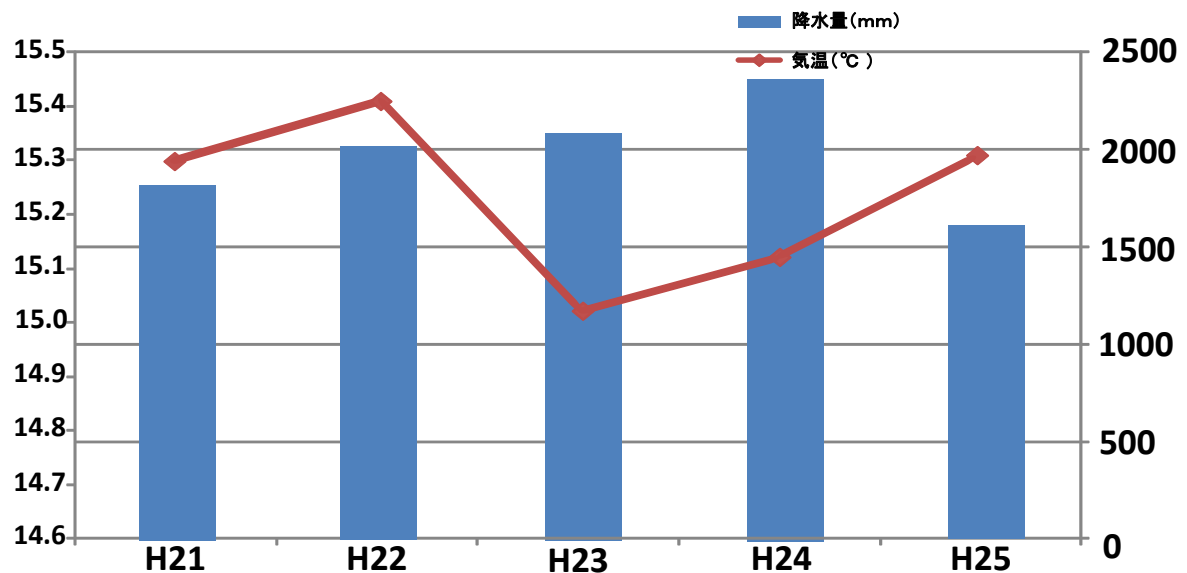


図1-2B 亀山市の5年間の降水量及び平均気温の推移



(2) 自然景観

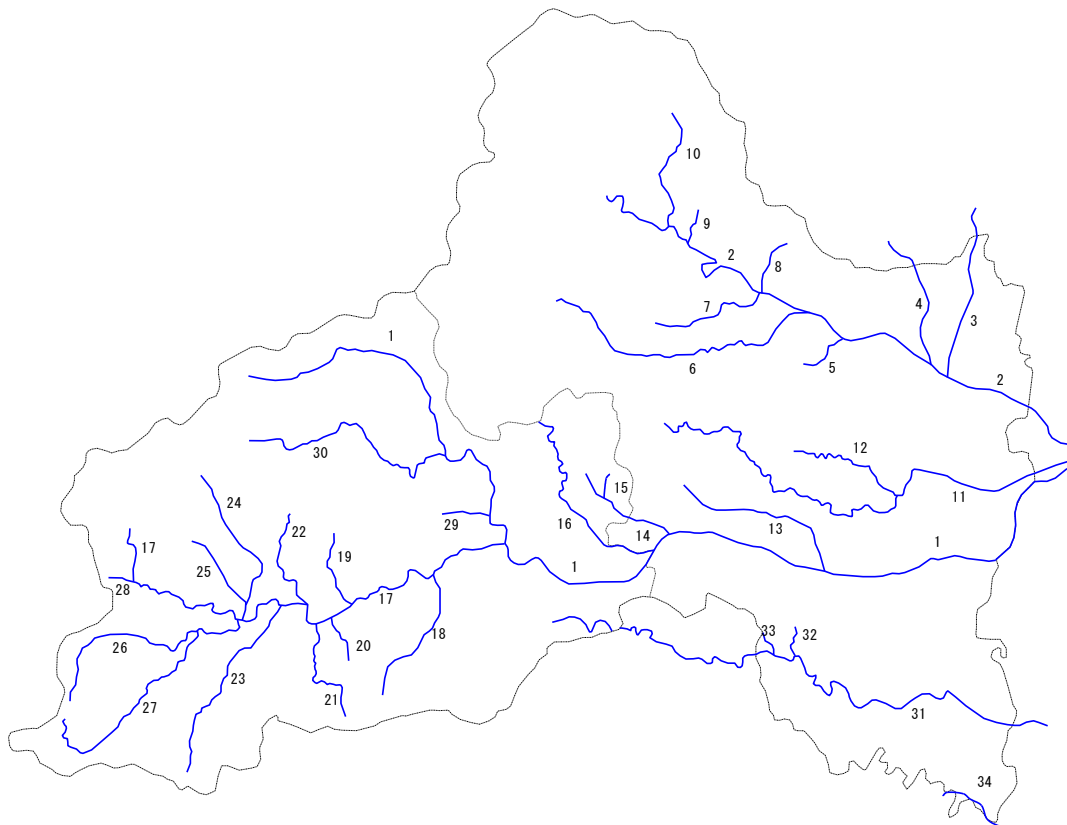
①河川

当市は、ほとんどが1級河川鈴鹿川の流域に含まれていますが、一部は2級河川の中ノ川流域及び志登茂川流域に属しています。これら河川は都市を構成する重要な要素であり、環境、景観、防災等において大きな影響があります。

三重、滋賀両県境の高畑山麓たかはたさんろくに源を発する鈴鹿川は、加太川、椋川、安楽川などの支流とともに、山地、丘陵地、台地を浸食して市内を西から東へ貫流し、中・下流域に水田地帯を形成しています。また、中ノ川は関町萩原地内に源を発して東へ流れ、津市芸濃町から当市南部を流下したのち、鈴鹿市内を経て伊勢湾へと注いでいます。

当市および周辺の主な河川の地図を図1-2に示します。

図1-2 当市および周辺の主な河川（一級・二級河川）



凡		例		
1. 鈴鹿川	8. 我女川 <small>がめ</small>	15. 石場川	22. 蛇谷川 <small>あぶたに</small>	29. 市の瀬川
2. 安楽川	9. 水晶谷川 <small>すいしゅうだに</small>	16. 小野川	23. 神武谷川	30. 中津川
3. 御幣川 <small>おんひ</small>	10. 宮川	17. 加太川	24. 出雲谷川	31. 中ノ川
4. 八島川	11. 椋川	18. 越川 <small>えち</small>	25. 吉ヶ谷川 <small>きちがたに</small>	32. 洲美川 <small>すみ</small>
5. 原田川	12. 亀田川	19. 半谷川 <small>うしかたに</small>	26. 喜和田川	33. 西藤川
6. 前田川	13. 竜川	20. 平子川	27. アマタノ川	34. 前田川
7. 大門川	14. 桜川	21. 小神武谷川 <small>こじんむたに</small>	28. 大岡寺川	

## ②山

市内北部には鈴鹿山脈から東方に向かって急峻な仙鷄尾根が伸び、その先端に野登山（851.6m）をようし、西部には鈴鹿の鹿島槍ヶ岳とよばれる仙ヶ岳（961m）から御所平（850m）、安楽越、四方草山（667m）、三子山（568m）、鈴鹿峠に至ります。その間には稜線に向かって尾根を接続させている長坂の頭（610m）、臼杵ヶ岳（697m）、雨引山（411m）、明星ヶ岳（549.4m）などがあり、関町の関富士周辺には観音山、筆捨山、羽黒山、花の木と標高300m前後の五山がお椀を伏せたように連なっています。

また、鈴鹿峠からは高畑山（773.3m）、那須ヶ原山（800m）、三国岳から南に霊山（765.8m）へ続き、東方へ蝙蝠峠、錫杖ヶ岳（676m）等を中心とする切り立った岩尾根からなる布引山地の山々が連なっています。



鈴鹿山脈

## (3) 地質

当市の山岳地帯を構成する岩石は主として古生代ペルム紀（2億8,900万年前～2億4,700万年前）の地層と中生代白亜紀（1億4,300万年前～6,500万年前）の花崗岩類です。特に黒雲母花崗岩類からなる仙ヶ岳は、鈴鹿山脈主稜線の南端付近に位置しており、南側はそれら花崗岩類が深く侵食を受け急峻なV字谷の地形をつくっています。このように中生代白亜紀の花崗岩類が浸食されてつくられた急峻な地形を、亀山周辺で数多く見ることができます。

鈴鹿山脈東側の急傾斜地には一志断層帯が横切っており、それらを境界として東側に約6,500万年前から現在までの時代の地層がつくる山麓、丘陵、台地および河川の堆積作用によってできた平野が広がっています。

鈴鹿山脈の山麓地帯では、主に約2,400万年前から500万年前に堆積した地層である鈴鹿層群（泥岩・砂岩・礫岩などで構成）により地形が形成されています。またさらに東側の丘陵地帯は、510万年前から1万年前に堆積した地層である東海層群（半固結の粘土・シルト・砂・礫などで構成）により主要な地形が形成されています。

これらの丘陵地形は、東西に流れる主要河川のために大きく分断されています。丘陵地形をつくる東海層群は河川の侵食に対する抵抗が弱いため、当市に広がる丘陵地では浸食作用により地表が削られ、数多くの谷が存在しています。

台地は段丘堆積物および扇状地堆積物からなっています。いずれも粗粒な礫、砂、泥層からなり半固結状態です。

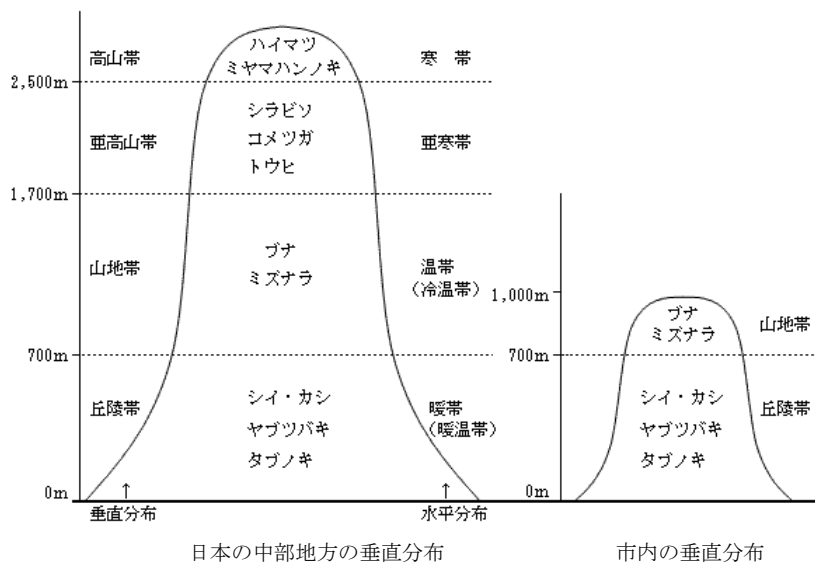
#### (4) 生物

##### ①植物

植物相（生育している植物の種類）については、シダ植物は24科173種の生育が確認され、その中には絶滅危惧種の植物も7種含まれています。また、種子植物に関しては、156科1,637種が確認され、その中で81種が絶滅危惧種です。

北半球では南から北に移るに従って気温は低下し、気候帯ができています。一方、低地から高山に登っていくと次第に気温が低くなります。標高100m登るごとに0.5℃～0.6℃気温が下がるため高山にも気候帯があり、それを区分する高さは高緯度になるに従って低くなります。日本の中部地方と当市の植物の垂直分布を図1-3に示します。

図1-3 植物の垂直分布



市内の平野から丘陵部にかけての代表的な自然林は、シイ・カシを中心とする常緑広葉樹からなる暖温帯林であって、現在も社寺周辺に残存しています。しかし、現在の多くは代償植生となっています。それを概観すると、スギ・ヒノキの植林地やモウソウチクを中心とする竹林が大きく広がっています。かつてシイ・カシ林伐採を繰り返した貧養地には発達したアカマツ林域も目立っています。

また、田・畑などの耕作地や民家の周辺には、今も薪炭林<sup>しんたんりん</sup>や落ち葉を肥料として利用するために育林されたコナラ林、クヌギ林が存続しています。

丘陵部にはかつてはクワ畑が広がっていましたが、現在は茶園として利用されており、その栽培面積も毎年拡大し、亀山特産の茶の生産地となっています。

市内に産する日本固有種の内、希少種と考えられる植物には、イヌブナ、ヤマグルマ、ヤマシャクヤク、イチリンソウ、トリガタハンショウヅル、トウゴクサバノオ等があります。

市内に生育する帰化植物としては、コハコベ、ナズナ、セイヨウタンポポ等がありますが、これらは人々の移動や他国との物質のやり取りの中で広がったものと思われます。

市街地にも特筆すべき植物が存在しています。本町、江ヶ室町、東御幸町、西町等14ヶ所で、イヌノフグリが発見されました。イヌノフグリは近年絶滅の危機<sup>ひん</sup>に瀕している植物として、環境省においては絶滅危惧Ⅱ類（VU）に、近畿地方及び三重県では準絶滅危惧（NT）として、その保護・保全に努めている植物です。県内では北西から南西にかけて点在しますが、生育地、個体数ともに限られている希少種です。



ナズナ



イヌノフグリ

また、植林については、スギ・ヒノキが主な樹種です。スギは常緑広葉樹林帯（ヤブツバキクラス域）から落葉広葉樹林帯（ブナクラス域）にかけての土層の厚い湿潤地<sup>しつじゅんち</sup>に植えられています。ヒノキは関東以南の主として尾根筋や急斜面など比較的乾燥している立地に植えられており、市内における植林についても同様の傾向が見られます。

お椀を伏せたような丘陵地や鈴鹿山脈から派生した尾根筋にはアカマツ林が発達しています。これらの地形は日当たりも良く、風当たりも強く、土壌は浅く、乾いた露岩<sup>ろがん</sup>が目立つ貧栄養地であるため、そのような環境に適したアカマツにより植生が形成されています。

市内の多様な植生は、長い年月をかけて育まれてきました。その中には今日見ることが出来ない植物や、ごくわずかな個体がひっそりと生活しているものもあります。シダ植物のマツバランもその一つで、1983年12月17日、山内繁太郎氏によって関町鷲山の羽黒山において採取された後、今日まで確認することができませんでした。しかし、絶滅したと思っていたマツバランが羽黒山から離れた関町内で見つかったことは、25年ぶりの快挙です。

## 市内で見られる植物

### <ササユリ>



山地に生える<sup>たねんせいそうほん</sup>多年生草本です。本州（中部以南）、四国、九州に分布しています。希少種、景観構成に主要な種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。また、「三重県レッドデータブック 2005」に準絶滅危惧（NT）として掲載されています。

### <シライトソウ>

山地の木の陰に生える多年生草本です。本州（関東地方、新潟県以西）、四国、九州に分布しています。希少種、景観構成に主要な種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。



### <シュンラン>



山林や低山地の乾燥した土地に多い常緑多年生草本です。北海道（奥尻島）、本州、四国、九州に分布しています。景観構成に主要な種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。

### <コ克蘭>

関東から西の<sup>りんか</sup>林下の湿った所に生える多年生草本です。本州（東海道、近畿地方以西）、四国、九州に分布しています。希少種として、鈴鹿国定公園の指定植物に選定されています。



### <スズカカンアオイ>



葉には<sup>すいできじょう</sup>水滴状の斑紋があることが多く、<sup>ほんもん</sup>卵形～<sup>こうらんけい</sup>広卵形で、基部は心形をしています。葉柄は長く、紫色を帯びます。このアオイはギフチョウの幼虫の食草となっています。

### <イワカガミ>

北海道から九州の高山帯から亜高山帯にかけて生育する多年生の草本です。岩場や急傾斜地などに群生します。葉は丸く、光沢があり、花は主に淡紅色で、先端は細かく裂けています。イワカガミの名は、岩場に生えることと、光沢のある葉を鏡に見立てていることに由来しています。



### <ミカエリソウ>



別名をイトカケソウ（糸掛草）とも言う中部地方以西の山地の林床に群生する落葉小高木です。茎の先端に長さ7～15cmの細長い花穂が立ち、筒状のくちびる形の花が3個ずつ対生して密につきます。自生地では群生している場合が多く、開花期は大変に美しい景観を呈するので、思わず見返ることから命名されたと言われています。

### <タニウツギ>

スイカズラ科の落葉低木です。溪流沿いや谷間に多く自生します。開花時期は田植えの時期と同じ4～5月で、別名タウエバナとも呼ばれ、枝垂れるように淡紅色の花をつけます。若芽は食用にでき、材は堅く木釘や楊枝にも使われます。ただし、「卵の花」の名で知られる本来のウツギはユキノシタ科の植物でこれとは全くの別物です。



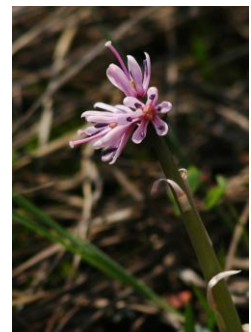
### <スズカアザミ>



東海地方、近畿地方に分布するアザミで高さ1～1.5m程です。頭花は紅紫色でやや穂状に、上向きまたはやや斜め上向きにつき、花冠は長さ14～20mm、直径は16～23mmです。茎葉は羽状に深く裂けるのが普通で、基部は茎を抱くものと抱かないものがあります。

### <ショウジョウバカマ>

谷筋や山野の湿った所に生える草丈10～25cmの多年草です。花は淡紅～淡紫色で、茎先にかたまって付きます。雪の多い地域では湿った落葉樹林下に生え、雪が解けたばかりの斜面に咲いていることもあります。名の由来は、花を猩々（しょうじょう；中国の伝説の動物）の赤い顔に、葉の重なりを袴に見立てたものと言われています。



②動物

市内で確認された動物の種数を表1-1に示します。

表1-1 市内で確認された動物の種数

分類群	門	綱名	目数	科数	種数
哺乳類	脊索動物	哺乳	7	14	26
鳥類	脊索動物	鳥	14	40	130
爬虫類	脊索動物	爬虫	2	8	14
両生類	脊索動物	両生	2	7	19
淡水魚類	脊索動物	硬骨魚・頭甲	8	14	42
クモ類	節足動物	蜘蛛(クモ)	1	43	371
十脚類	節足動物	軟甲綱	1	5	7
貝類	軟体動物	腹足・二枚貝	7	23	80
総計	3門	10綱	41	154	689

哺乳類は外来種も含め、7目14科26種が確認されました。目別にみると、霊長目<sup>れいちょうもく</sup>のニホンザルは北西部の山地を主体に広く生息し、はなれ個体は三寺町など丘陵地にも出没するようです。食肉目はキツネ、タヌキ、テン、イタチの在来種4種および外来種のチョウセンイタチとハクビシンの計6種が確認されました。キツネとタヌキは広域的に、テンは主として北西部の山地域に分布し、イタチ属2種は平地および丘陵地では混生しているようです。偶蹄目はイノシシ、ニホンジカおよびカモシカの3種が確認されました。イノシシは北西部山地から下庄町など南部丘陵地にかけて、ニホンジカは北西部山地山麓に広く分布します。また、カモシカは白木町で確認されましたが、市内北西部の山地は現在のところ鈴鹿山系個体群の分布南限地にあたっています。齧歯類<sup>げっしるい</sup>はニホンリス、ムササビ、スミスネズミ、ヒメネズミ、アカネズミ、カヤネズミおよび外来種のヌートリアの7種が確認されました。ニホンリスは北西部山地の主として二次林に広く分布し、ムササビおよびスミスネズミは野登山などで確認されていますが、分布は局所的なようです。ヌートリアは椿世町の椋川水系で1頭確認されていますが、隣接する鈴鹿市では鈴鹿川本流および御幣川でも確認されています。ウサギ目のノウサギは鈴鹿川河川敷など平地、丘陵地から山地まで広域的に分布しています。

鳥類は14目40科130種が確認され、渡りの区分では留鳥<sup>りゅうちょう</sup>59種(45.4%)、夏鳥30種(23.1%)、冬鳥35種(26.9%)、旅鳥6種(4.6%)という結果が得られています。科別構成では、隣接する鈴鹿市と比べると、カモ科8種(6.2%)等の出現率が低いですが、このことは海岸・干潟<sup>ひがた</sup>が分布せず、一方、山岳・丘陵地の広い当市の特色を顕著に反映した結果であると同時に特色ともいえます。



爬虫類は外来種も含め、市内で14種が確認されました。目別にみると、カメ目はイシガメ、ミシシippアカミミガメおよびスッポン(三重県レッドデータブック2005で情報不足：DD)の3種が確認されましたが、そのうちイシガメは平地の池沼、河川から石水溪などの山地溪流にかけて広域的に確認されました。一方、外来種のミシシippアカミミガメは本丸町の公園池、椿世町の調整池、椋川などで確認されましたが、公園池では幼体も多く、増加傾向にあります。スッポンは鈴鹿川本流と椋川で確認されました。なお、クサガメについては隣接地の鈴鹿市では当市と比較的近い幾つかの池沼で確認されています。

有鱗目トカゲ亜目はニホンヤモリ、ニホントカゲおよびニホンカナヘビが確認されました。ニホンヤモリは江ヶ室町および和田町の住宅で確認されましたが、関地区も含め住宅地には広く生息していることが考えられます。後の2種は市内に広域的に分布しています。有鱗目ヘビ亜目はアオダイショウ、シマヘビ、シロマダラ(同準絶滅危惧：NT)、タカチホヘビ(同準絶滅危惧：NT)、ヒバカリ、ヤマカガシおよびニホンマムシの三重県産既知種の8種すべてが確認されました。

両生類は有尾目3科5種、無尾目4科14種の計7科19種が確認されました。有尾目のうち、カスミサンショウウオ(同絶滅危惧Ⅱ類：VU)は下庄町、中庄町、三寺町などの南部丘陵地で、コガタブチサンショウウオ(同準絶滅危惧：NT)およびヒダサンショウウオ(同準絶滅危惧：NT)は安坂山町、野登山などの山地域で確認されましたが、いずれも生息地が局所的であり、分布上注目される種です。アカハライモリは西部山麓を中心に水田、水路、河川、池沼などで点的に確認されましたが、南部丘陵地の水辺にも分布しているものと推察されます。一方、オオサンショウウオ(同準絶滅危惧：NT)は関地内の鈴鹿川で成体の確認がありますが、自然分布か否かは今後も調査が必要です。

無尾目の県産既知種は15種で、これらのうち、幼生が止水性の種は11種みられますが、ニホンアカガエル、ニホンアマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヌマガエルおよびシュレーゲルアオガエルは市内の主として平地、丘陵地の水辺には広域的に分布しています。ツチガエルは中西部の河川、池沼などで確認されましたが、南部丘陵地にも分布していると考えられます。また、ニホンヒキガエル(同準絶滅危惧：NT)、モリアオガエルおよびヤマアカガエルは中西部の山地および山麓で確認されましたが、前2種の生息地は局所的で、一方、幼生が流水性の種としては、ナカレヒキガエル、タゴガエルおよびカジカガエルの3種が北西部山地域に分布しますが、タゴガエルは広域的に認められ、また、カジカガエルも河川中上流域には連続的に生息しています。

淡水魚類は42種確認されており、科別に見ると、コイ科が13種で最も多く、次いでハゼ科が7種で、この2科で半数以上が占められています。他では、サケ科およびドジョウ科が3種、ギギ科およびサンフィッシュ科が2種、ツメウナギ科、ウナギ科、アユ科、ナマズ科、アカザ科、メダカ科、カダヤシ科およびカジカ科が各1種となっています。

市内で確認された昆虫の種数を表1-2に示します。

表1-2 市内で確認された昆虫の種数

目	科数	種数	目	科数	種数
カゲロウ	10	46	トンボ	11	65
直翅 <sup>ちよくし</sup>	15	80	ゴキブリ	2	2
カマキリ	2	5	ナナフシ	1	3
ハサミムシ	2	4	半翅	64	425
等翅	1	1	チャタテムシ	4	10
広翅	1	3	脈翅	7	17
長翅	1	5	双翅	22	78
甲虫	92	1947	ハチ(ハチ類)	26	268
ハチ(アリ)	1	44	トビケラ	26	106
鱗翅 <sup>りんし</sup> (チョウ類)	5	82	鱗翅(ガ類)	48	1134
計	341	4325			

昆虫類の中で、トンボ目は、11科65種確認されました。科別構成はトンボ科が20種、サナエトンボ科が13種で、この2科で半数余りの50.8%を占めていますが、これは県産既知種における割合(53.5%)と似た傾向にあります。また、幼虫が止水性種と流水性種の割合は止水性種が41種(63.1%)、流水性種が24種(36.9%)であり、この比率も県内既知種全体の比率と同率となっています。鱗翅目(チョウ類)は、5科82種が確認されました。これらの種の生息状況は、平地性の種は市内南東部に多く、山地性の種は北西部に限られる傾向にあり、当市の地勢を反映していると考えられます。

#### 市内に生息する動物

##### <オオタカ>



全長雄約50cm、雌約60cm、成鳥の体の上面は暗青灰色<sup>せいかいしよく</sup>で、尾には黒色の横帯<sup>よこおび</sup>が3~4本あります。低地から山地の林に生息し、農耕地や市街地に出現することもあります。秋冬には低標高地に移動する個体もあります。数回やや早く羽ばたき、短い滑翔<sup>かつしょう</sup>を交えて直線的に飛びますが、帆翔<sup>はんしょう</sup>もよく行います。獲物は鳥類が多く、ヤマドリ、キジ、カモ類、シギ類、キジバトなどを捕らえます。

アカマツ、モミなどの高木の枝上に、枯れ枝を使って直径75~90cmの皿型の巣<sup>ほうらん</sup>を作り、普通3~4卵を産み、抱卵日数は約35~41日、育雛<sup>いくすう</sup>期間は35~40日です。巣立ちは本州中部では6月中旬~7月上

旬です。本種は個体数が少ないうえ、剥製などを目的とした密猟や、開発による繁殖適地の減少などが心配され、種の保存法による指定及び「三重県レッドデータブック2005」の絶滅危惧Ⅱ類（VU）の指定を受けています。低山帯の森林の生態系の頂点に位置しているため、生態系全体の保護が必要とされます。



### <モリアオガエル>



東南アジアの熱帯を中心に分布するアオガエル科の中で最も北方に分布するアオガエルで、樹上性の日本固有種です。体長は雄で57mm、雌で72mm程度で、雌の方が著しく大きい特徴があります。神奈川、茨城県を除く本州と佐渡に分布が知られ、主として山地帯の森林に生息します。繁殖期は5～7月頃で、同一地点でもかなり長く

継続し、繁殖場所は森林内の池や湿地、林縁の水田などで、主に止水上に張り出した植物の枝先に卵泡をつくり産卵します。産卵の際には性比に偏りがみられ、多くは一雌複雄です。孵化した幼生は下にある止水に落下して、そこで生活し、7～9月に変態し上陸します。

仔蛙は主として林内の多湿な場所の大型草本の葉上等で見られます。非繁殖期には草本や広葉樹の枝上で生活し、樹上性の直翅類等の昆虫やクモ類を食べます。



### <ネコギギ>



全長約15cmで、伊勢湾及び三河湾に注ぐ河川の中流域にのみ分布する日本固有種です。最も小さなギギの一種で、7～8cmで成熟します。頭部は丸く、尾鰭後縁の切れ込みは浅く、ずんぐりしており、比較的大きな眼をしています。

夜行性で、緩やかな流れの浮き石の下や岸辺のヨシ場などの隙間を中心に生息し、川底近くをゆっくりと遊泳し、大きな淵では群泳することもあります。主に底生動物、特に水生昆虫を食べ、産卵期は6～7月頃で、なわばり行動はあまり示しません。

河川改修における護岸のコンクリート直線化による生息環境の消失などのため、近年、個体数の減少が著しく、1977年に国の天然記念物に指定されています。

### <ルリボシヤンマ>

複眼の大きい、黒褐色の地に黄緑色と瑠璃色の小斑を散りばめた大きなヤンマで、雌雄ほぼ同じ大きさで、体長は約60mmです。日本、サハリン、朝鮮半島北部から中国北東部、シベリアを経てヨーロッパまでとカムチャッカからアラスカ、カナダ、アメリカ北部に至る高緯度地方に広く分布しています。国内では北海道、本州、四国と利尻、佐渡、対馬等の離島に分布しますが、近畿以西では産地が著しく局地化します。主に寒冷な湿地や泥炭地の比較的浅くて小さい池沼等に棲み、成虫は夏に出現し、秋までみられます。現在「三重県レッドデータブック2005」に絶滅危惧ⅠB類（EN）として掲載されています。



### <ギンイチモンジセセリ>

「三重県レッドデータブック2005」の絶滅危惧Ⅱ類（VU）、全国版では準絶滅危惧（NT）です。主として明るい草原にみられるセセリチョウで、自然状況下では火山性草原や大河川の河原が生息地と考えられています。高温多雨で地質時代でいうと第四紀という新しい時代に活発な火山活動がなく、森林発達が妨げられることの少ない三重県においては、元々生息に適した環境が乏しかったと思われれます。市内では加太北在家で確認されました。三重県としては内陸的気候で雨量が少なく、草原の発達しよい伊賀地方が主たる分布圏ですが、一部伊勢湾岸の松阪市を中心とする平野部でも確認されています。市内南東部では天神町の鈴鹿川河川敷での生息が確認されていましたが、近年この平野部産地群は主分布地の松阪市を含めて、ほとんど確認されていません。



市内に生育、生息する生物の中には、上記のように絶滅の恐れのあるものがあります。この絶滅の恐れのある生物の保護、保全を進めるため、レッドリストが作成されています。本紙には、表1-3に示す三重県の動植物に関するレッドリストのカテゴリー区分を表記しました。

表 1-3 レッドリストカテゴリー区分

三重県	
<b>EX</b>	<b>絶滅(Extinct)</b> すでに絶滅したと考えられる種
<b>EW</b>	<b>野生絶滅(Extinct in the Wild)</b> 野生状態ではすでに絶滅したと考えられているが、飼育等の状態で生存が確認されている種
<b>CR</b>	<b>絶滅危惧 IA 類(Critically Endangered)</b> ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種
<b>EN</b>	<b>絶滅危惧 IB 類(Endangered)</b> IA 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
<b>VU</b>	<b>絶滅危惧 II 類(Vulnerable)</b> 絶滅の危険が増大している種
<b>NT</b>	<b>準絶滅危惧(Near Threatened)</b> 現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
<b>DD</b>	<b>情報不足(Data deficient)</b> 評価するだけの情報が不足している種

三重県HP「みえの自然楽校 自然を楽しく学ぼう」から抜粋

<http://www.pref.mie.lg.jp/MIDORI/HP/shizen/ikimono/rdb/kategori.htm>

## (5) 亀山里山公園

当市では、市内の荒廃地を活用し、市民のふるさととの出会いの場として、当市固有の自然環境を再生することにより、「生きとし生けるもの」とのふれ合いと体験を通じて環境意識の更なる高揚を図ることを目的として、面積およそ3.5haの亀山里山公園を整備し、平成18年度より市民の皆様に楽しんでいただいています。園内では、山野草、樹木、魚類、鳥類等四季に応じた様々な生き物が生息し、自然環境を形成しています。



### ①植生

亀山里山公園は、丘陵地の端に位置する南北方向の谷間です。東部及び西部の上部は畑地や住宅地となっており、中央の谷底部分は、池を中心にした水辺環境が広範囲を占めています。

池では、ガマ群落、ヒメガマ群落、スイレン属群落の形成がみられ、その下層には、ミゾソバ、セリが繁茂しています。また、やや湿った所や小川付近には、サギソウ、マツカサススキ、カキツバタ、ショウブなどが繁茂しています。

山林は、コナラ、ヤマザクラ、ヤマハゼ、シロダモ、アラカシなどの二次林やスギ植林などであり、いわゆる里山林となっています。その下層には、エビネ、キエビネ、フクジュソウといった山野草が繁茂しています。

春季には、通路の縁に植栽されたシャガが鮮やかな白色の花をつけ、またタチツボスミレの紫色、チョウジソウの青紫色、キショウブの黄色等各種の色をつけた花が園内を彩ります。



夏が近づくにつれて、園内のショウブやアヤメも開花し、スイレンの黄色い花が開花をはじめの頃には、木本ではフジ、アケビ、アジサイやネムノキ、山野草ではミソハギ、サギソウ等が開花し、賑やかな彩りとなってきます。

秋が近づくにつれて、ミゾソバ群落がピンク色に色づき、畦に沿ってヒガンバナの赤色が広がり、一面華やかな雰囲気となってきます。ヤナギ類の穂が風によって飛ぶ頃になると、紅葉もすすみ、林縁にはコナラやアラカシのドングリが散乱し、水辺にはワレモコウやオモダカが繁茂し、カラスウリのオレンジ色の実が目立つようになります。水辺の草本は枯れ始め、ガマやヒメガマの穂が懐かしさをもし出す様に秋を演出してくれます。

冬になると、園内一面の草本は枯れ、湿地性の高茎草本であるヨシやガマが枯れた状態で風に吹かれるようになります。

園内で見られる山野草



シャガ



ホタルブクロ



ノカンゾウ



カキツバタ



マツカサススキ



ワレモコウ

②動物

園内は、山林に囲まれた湿地や小川などの水辺環境となっているため、園内やその周辺に生息している動物の餌場や繁殖場所として利用されています。

水辺では、メダカ、スジエビ、カエル（幼生）、トンボ類のヤゴなどが多く観察されます。生息する魚類の種類は少なく、メダカ、ギンブナが確認できますが、メダカについては、特定の場所で個体数が多く生育しています。スジエビについては、園内全域で見られ、飛来してくるサギ類などの餌となっているようです。

山林や林縁部では、セキレイ、メジロ、カワセミなどが頻繁に出現し、ヤナギ類やガ

マ等の穂などを伝って、園内を移動している様子が観察されます。また、キジも生息しており、春から夏にかけては鳴き声が頻繁に聞こえてきます。

春先から夏にかけては、ヨシやガマの群落を利用して、カルガモが繁殖している様子を見ることができます。水深の浅いところでは、ニホンアカガエル、ツチガエル、ヌマガエルの幼生を観察できます。園内の奥にある池では、ザリガニの個体数も少なく、メダカが群をなして泳いでいる様子や、ギンヤンマが餌を求めて水面を飛翔している様子が観察できます。また、山林には、クリやコナラの樹木が多く、樹液を求めて、カブトムシやクワガタも多く集ってきます。



秋頃からは、越冬するツチガエルの幼生、カマキリ、カナヘビが多く観察できるようになります。また、来園者の少なくなるこの時期になると、餌を求めて水辺を移動しているイタチが頻繁に出現するようになり、カワセミも朝夕に飛来するようになります。

冬になると、水辺に生息している生き物は冬眠に入りますが、メジロの混群が頻繁にヤナギの枝に止まるようになり、鳥の囀りさえずりが賑やかになってきます。また、カモ類が飛来し、池の水面を泳いでいるのが観察できます。

#### 園内で見られる鳥類、昆虫



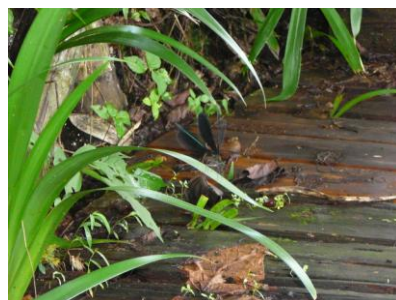
アオサギ



コゲラ



ジョウビタキ



ハグロトンボ